



令和8年10月10日
発行・公益財団法人 交通遺児育英会
〒102-0093 東京都千代田区平河町2-6-1
(電話) 03 (3556) 1789
(HP) <https://www.kotsuji.com>

©交通遺児育英会

米国語学研修 高校生21人が帰国



今夏、海外語学研修に参加した高校奨学生21人が8月8日、米国から帰国した。一行は3週間の日程で現地家庭にホームステイしながら語学学校に通学・写真。また、全国から集まった高校奨学生と親睦を深め、社会見学など課外活動を通じて米国の歴史・文化にも親しんだ。

「つどい」は交通遺児の「仲間づくり」を主な目的に掲げる一方、99年（平成11）年からは保護者も参加して、日ごろの思いや悩みを共有する場ともなっている。当初は年度ごとに各地区を回るブロック開催だったが、

2012年度以降は全国一括開催方式となった。高校奨学生85人、保護者92人のほか同伴の家族28人の計84家族205人が参加。現在の開催方式では、最多の人数となった。開会の挨拶に立った石橋健一会長は、交通遺児育英会の中核事業となった「つどい」の沿革に触れながら、現在の修学支援事業を紹介。「つどい」参加者の要望から実現した例として、心塾関西寮の設置や進学支援金制度（浪人生支援）を挙げ、

「（つどいは）私たちが直接、保護者の方からの要望をうかがうことができる貴重な機会。この機会に、ぜひいろんな意見やアイデアを聞かせてほしい」などと呼びかけた。続いて奨学生、保護者による講演が行われ、関西心塾生の川向宇瞳さん（23）＝神戸芸術工科大学4年＝と、東京都の看護師、荻田恵理さん（53）が登壇した。それぞれ交通事故で父親・夫が重傷を負った経緯を振り返り、今後の目標や現在の心境などについて語った。（2面に川向さん、荻田さんの講演要旨を掲載しています）

講演後、保護者は計11グループに分かれて懇談会に参加した。



心塾生をまじえてフリートーク「奨学生ミートアップ」

高奨生と心塾生がテーブルを囲んで、進路や学校生活、心塾での寮生活など自由なテーマで話し合う「奨学生ミートアップ」が初めて開催された。保護者から「高校生が同世代、大学生の先輩らと話し合える場を」との要望を受けて実現した。高奨生36人が4グループに分かれ、各グループに心塾生2、3人が参加。受験や寮生活、人間関係などについてアドバイスするなどした。今回はヤングケアラーの実情や支援対策に詳しい立正大教授（社会福祉学）の森田久美子さんが特別参加し、フリートークに加わった。初対面とあって最初はぎこちなかった参加者も、自己紹介から始まり、徐々に打ち解けた雰囲気になった。心塾生に促され、部活動などの学校生活、進路や受験情報の交換、ゲームやアニメなど趣味についても話し合った。

参加を終えた森田教授は「（心塾の）大学生の生活実態に関するアンケート（ヤングケアラー・アンケート）」の調査概要がまとまった。お世話している家族が「現在いる」と答えた奨学生は36人（7・3％）おり、「過去にいた」の18人を含めると全体の11・0％と、若干の減少傾向がみられた。当会は調査を始めた2024年以降、ヤングケアラーに該当するとみられる奨学生らと面談を実施。計123人から実態を聞き取り、各家庭の実情に合わせて、行政・関係機関の窓口の紹介や障害者支援団体などの連携調整を行っている。当会では、引き続き該当世帯への面談を継続し、奨学生の修学支援につながる方策を検討する方針。

3回目の今回調査は全奨学生740人のうち490人が回答し、回答率は66・2％で過去最高だった。

「同じ境遇同士で懇談」参加者アンケートで高評価

交通遺児育英会が「つどい」終了後に実施したアンケートでは、「とても良かった」「良かった」と答えた参加者が9割超（保護者95％、高奨生98％）に上り、前年度に続いて高い評価を得た。「つどい」の内容に関して具体的に良かった点や、今後の改善点を問うと、「同じ体験・境遇の人たちと話ができて感じた」などの感想が寄せられた。

今年度ヤングケアラー調査概要まとまる

取材の必需品の一つにICレコーダーがある。かつての磁気テープ録音は音質も使い勝手も微妙で、あくまで補助の役割。メモを取りまくった。後に機能も音質も向上して登場したICデジタル機にはずい分と助けられた▼技術の進歩は目覚ましく、レコーダーにもAI（人工知能）が搭載されるように。音声を直ちにテキスト変換してくれるという。もっとも初期製品を試した際は、誤字が目立ち解読精度も今一つ。ところが最新機種はAIの進化で文字変換の精度も速度も向上したとか▼試してみると旧型機とは雲泥の差。発言者を聞き分け、会話をほぼ正確に文書化する。音声データの文字起こしは取材時より時間がかかる。価格もこなれてきたようで、録音を聞き直す作業の手間を思えば買い替え時か？いや、でもちょっと待てよ。手作業にも何物にも代えがたい利点があるのでは▼音声と共に思い出す喜怒哀楽。語気の強弱に浮かぶ表情。言い淀み、呑み込んだ言葉の断片。短い沈黙に秘めた感情。周囲のざわめきやカッパが触れ合う音からはコーヒの香りまで漂ってきた。再現力の豊かさ。AIが出力した文書を読み返してもこうはいかない。AI頼みは先延ばしした。

「高奨生と保護者のつどい」84家族205人 現行方式での開催以降、過去最多

交通遺児育英会は8月22、23日、都内で「高校奨学生（高奨生）と保護者のつどい」を開いた。初日は今回初めて開かれる高奨生と心塾生による「奨学生ミートアップ」、多様な意見や要望が集まる保護者懇談会、チームワークでクリアを目指すグループワークゲーム（GWG）などが開かれた。2日目は心塾東京寮（東京都日野市）の見学会があり、大塚克文塾長（専務理事）や担当職員から説明を受けた。全国から集まった参加者は、職員や他の参加者と進学・就職や子どもとの接し方など、日ごろの思いを語り合った。

「つどい」は交通遺児の「仲間づくり」を主な目的に掲げる一方、99年（平成11）年からは保護者も参加して、日ごろの思いや悩みを共有する場ともなっている。当初は年度ごとに各地区を回るブロック開催だったが、

2012年度以降は全国一括開催方式となった。高校奨学生85人、保護者92人のほか同伴の家族28人の計84家族205人が参加。現在の開催方式では、最多の人数となった。開会の挨拶に立った石橋健一会長は、交通遺児育英会の中核事業となった「つどい」の沿革に触れながら、現在の修学支援事業を紹介。「つどい」参加者の要望から実現した例として、心塾関西寮の設置や進学支援金制度（浪人生支援）を挙げ、

「（つどいは）私たちが直接、保護者の方からの要望をうかがうことができる貴重な機会。この機会に、ぜひいろんな意見やアイデアを聞かせてほしい」などと呼びかけた。続いて奨学生、保護者による講演が行われ、関西心塾生の川向宇瞳さん（23）＝神戸芸術工科大学4年＝と、東京都の看護師、荻田恵理さん（53）が登壇した。それぞれ交通事故で父親・夫が重傷を負った経緯を振り返り、今後の目標や現在の心境などについて語った。（2面に川向さん、荻田さんの講演要旨を掲載しています）

講演後、保護者は計11グループに分かれて懇談会に参加した。

「同じ境遇同士で懇談」参加者アンケートで高評価

交通遺児育英会が「つどい」終了後に実施したアンケートでは、「とても良かった」「良かった」と答えた参加者が9割超（保護者95％、高奨生98％）に上り、前年度に続いて高い評価を得た。「つどい」の内容に関して具体的に良かった点や、今後の改善点を問うと、「同じ体験・境遇の人たちと話ができて感じた」などの感想が寄せられた。

今年度ヤングケアラー調査概要まとまる

取材の必需品の一つにICレコーダーがある。かつての磁気テープ録音は音質も使い勝手も微妙で、あくまで補助の役割。メモを取りまくった。後に機能も音質も向上して登場したICデジタル機にはずい分と助けられた▼技術の進歩は目覚ましく、レコーダーにもAI（人工知能）が搭載されるように。音声を直ちにテキスト変換してくれるという。もっとも初期製品を試した際は、誤字が目立ち解読精度も今一つ。ところが最新機種はAIの進化で文字変換の精度も速度も向上したとか▼試してみると旧型機とは雲泥の差。発言者を聞き分け、会話をほぼ正確に文書化する。音声データの文字起こしは取材時より時間がかかる。価格もこなれてきたようで、録音を聞き直す作業の手間を思えば買い替え時か？いや、でもちょっと待てよ。手作業にも何物にも代えがたい利点があるのでは▼音声と共に思い出す喜怒哀楽。語気の強弱に浮かぶ表情。言い淀み、呑み込んだ言葉の断片。短い沈黙に秘めた感情。周囲のざわめきやカッパが触れ合う音からはコーヒの香りまで漂ってきた。再現力の豊かさ。AIが出力した文書を読み返してもこうはいかない。AI頼みは先延ばしした。

川向 宇瞳さん（心塾関西寮）
＝神戸芸術工科大4年

で生きていくものではない」と感じます。誰かに頼ってもいい。誰かを頼ることは弱さではない。そんなことを学ばせていただいています。

将来は建築家として人が安心して暮らせる場所、人と人がつながる場所を作りたいと思います。建物 は完成すれば終わりではありません。人が集まり、笑顔が生まれ、支え合う関係ができて初めて、本当の意味での建築になると思います。父を含む家族との時間があつたからこそ、私はそんな建築を目指しています。最後に、私が皆さんにお伝えしたいことがあります。

人生には、自分ではどうす

ることもできない出来事があります。でも、過去は変えられなくても、その経験はどう生かして生きていくかは自分で決めることができます。

人は決して一人では生きら

れません。家族、友人、そして心塾で出会った仲間。大勢に支えられて今の私があります。感謝の気持ちを決して忘れないことが一番大切だと思います。心から「ありがとう」

と思えることが、豊かな人間になる一歩だと私は考えます。それが言葉になり、行動になることで本当の豊かさや出会

えるのではないだろうか。
だからこそ、今度は私が誰かを支える人になりたい。建

築を通して、人の暮らしを支える人になりたい。その思いを胸に、これからも学び続けていきたいと思います。

私は奈良県東の山間部で育ち父は私が生まれる前にバイク事故に遭い、私が物心ついた頃には車椅子で生活していました。父は車椅子でも車を運転し、公務員として働いていました。家に帰れば私と双子の兄を連れ出し、キャッチボールをしたり、休日は旅行へ連れて行ってくれました。父は不自由でも、私の中では父は何でもできる存在でした。そんな父でしたが、私が小学3年生の冬、再び交通事故に遭いました。下校途中、迎えに来た母からそのことを聞いた瞬間、頭の中が真っ白になり、「人生には何が起るかわからない」と知りました。長い治療を経て父は社会復帰しましたが、それから父は少しずつ変わっていきました。以前なら笑って済ませていたことでも怒るようになり、対人トラブルも増えました。家族に対しても感情的になることが増え、検査の結果、高

次脳機能障害と診断されました。事故で脳が損傷し、記憶や注意力、感情のコントロールなども障害が残ったのです。仕事も辞めることになり、一番苦しかったのは父だったと思います。母もまた病院への付き添い、生活サポート、父に寄り添いながら家庭を守る……体だけでなく心も疲れていく母を、私はただ見ていることしかできませんでした。当時中学生の私は、帰宅すると、今日は父の機嫌がいいのか悪いのかを最初に考えるようになりました。どうすれば家族がげんかにならないだろう、母にどんな言葉を掛ければいいだろう……そんなことばかり考えていました。

私は「家族を助けない」と思いつつも、何もできない無力さを感じていまし

た。高校に進んで将来を考えるようになった頃、早く自立して家族を支えたいと思うようになり、建築を学ぶため専

門学校へ進んだのです。物を作るのが好きだったこともあり、建築の勉強は新たな知見を私に与えてくれました。

しかし、学ぶ中で建築には単に建物設計するだけではなく、人の暮らしや人生を支える力があることを知り、「もっと深く学びたい」と決意し、現在は大学に編入して環境デザインという視点から建築を学んでいます。家庭内で安心できる場所の大切さを感じてきたからこそ、「建築で人を支えたい」という思いが強くなったのだと思います。

そんな大学生活ができるのも、心塾との出会いがあったからです。行事などで出会う塾生との会話にとても勇気付けられ、何げない会話でも同じ苦悩を抱えた人との関係はとても温かく感じました。

私は「自分が頑張ればいい」「自分が家族を支えなければ」と考えることが多々ありました。でも心塾では「人は一人

そんな大学生活ができるのも、心塾との出会いがあったからです。行事などで出会う

けられ、何げない会話でも同じ苦悩を抱えた人との関係は、とても温かく感じました。

私は「自分が頑張ればいい」「自分が家族を支えなければ」と考えることが多々ありまして。でも心塾では「人は一人

人は人に支えられ、勇気をもらう

当たり前と思うていた生活を失ったのが10年前でした。今日は私が選んだ生き方と、それを支えてくれた「つながりの力」についてお話したいと思います。

我が家には3人の子どもがいます。事故当時は2歳、小3、小6。事故に遭ったのは彼らの父親で雑誌の編集長、私は救急病棟で働く看護師でした。ある夜、自宅の電話を取った6年生に「警察から」

と言われた瞬間、直感的に「大変なことが起きた」と感じました。交通事故で意識不明と告げられ、子どもたちと病院へ向かいました。思い出すだけで涙が込み上げます。

植物狀態の父親は、食べる、排泄する、体を動かす——全てに支援を受けながら、共に自宅で過しています。言葉は交わせず、父親が何を思い、どう感じているのかは

わかないません。それでも、父親として家族の中で生きて、幸せであつたらいいなと思ひながら毎日を過ごしています。事故直後、子どもたちが願つたことは二つありました。

「事故のことは内緒にしてほしい」ということ。そして父親が元の姿には戻れないと伝えた時、「お父さんの居場所が家がいい」ということでした。この二つの約束を私は何よりも大切にしました。

「子どもたちが「もう話してもいい」と言ってくれたのは、事故から1年8か月後、父親が自宅に戻ってからでした。変わり果てた父親がいても、友だちが普通に家に遊びに来

ました。見ないふりをすると、会釈だけする子、さまざまでしたが、そこには子どもたちの優しさと思いやりが感じられ、今の姿の父親がいる我が家が少しずつ当たり前になっ

後に、なぜ話してもよくなくなったのか尋ねた時、子どもたちは「あの時は、かわいそうと思われたくなかった。今は見たらわかるからいい」と

言っていました。私は子どもが出来事を受け止め、受け入れられる速度は子ども自身が決めるもの、と知りました。

もう一つの約束、父親を自宅に連れ帰ることは簡単ではありませんでした。看取りもありませんでした。

覚悟し、少しずつ準備を進めました。行政の仕組みや制度を調べて利用しましたが、窓口をたらい回しされることもあり、やりきれなさや怒りのなかで、申請しなければ権利は

得られないと学びました。
父親の次に向き合ったのは
子どもたちの心でした。
最初は学校や保育園に事情
を話して見守っていたがま
したが、最後にたどる着いた

「被害者支援センター」で私は大切なことを二つ教わりました。それは、子どもには安心できる居場所や打ち込めることが必要なこと、寄り添ってくれる家族以外の第三者の

存在が大切でことです。
私が父親ばかり見ていたため、子どもたちは自分たちが忘れられているような寂しさや孤独を抱えていたのだと思います。だからこそ、子どもに寄り添ってくれる人の存在

が子どもの心の動きを知る手がかりになり、親以外の大人に支えられる環境はかけがえのないコミュニケーションとなりました。困っていることを勇気を出して声にと未来は確

実に開かれ、気付けば周りに大勢のサポーターがいました。私は子どもの心を育むということは、可能性を信じて任せることだと感じています。多様な大人や社会との関わり

「高校奨学生と 保護者のつどい」 講演録

※「高奨生と保護者のつどい」
で行われた奨学生、保護者の講
演を要約して掲載しています。

※「高奨生と保護者のつどい」で行われた奨学生、保護者の講演を要約して掲載しています。



荻田 恵理 さん (東京都)
＝看護師

の中で、子どもたちは自分らしく育っていくのだと実感しました。そして、我が家は子どもが安心して戻れる「安全基地」であればいいのだと思うようになりました。一方で、私の心を事故直後から支えてくれたのは父親の友人たちでした。父親の携帯を通してメールをやり取りし、日々現実を突きつけられる中で、24時間誰かが返事をくれるようなメールだからこそ本音を打ち明けられる関係がありました。また、悲しみを生き抜く方法がわからなかった私は、グループケアなどを学ぶ中で、私たちが家族が「曖昧な喪失」の中にいることに気がしました。失った悲しみはあるけれども完全に失っていない。姿はあるけれども元には戻らない。死によって完全な喪失にならないかもしれない。その不確かさを抱えながら生きている。悲しいけれど幸せで、つらいけれど守られていて、やりきれないけれどやりきる力をもらっている――そんな世界に私は生きて、そこで出会った人たちが私を支えてくれています。人は人に支えられ、感動し、勇気をもたらう、と知りました。この経験を還元していくことが、助けにくださった方々への恩返しなのだと感じます。

振り返ると、私は「どれほどつらく、何に困り、どうなりたいのか」を周囲に伝え続けたかったです。「子どもの権利を守りたい」「生活を立て直したい」「父親を家に連れて帰りたい」。声を上げる度に誰かが応えてくれ、気付けば良き理解者がたくさんいました。どうか一人で抱え込まず、つながりをお願いしてください。

遺族として…貫き通した医師への夢

【初志貫徹】。思い浮かぶのはこの言葉だ。「これが最後」と決めていた受験で、固く閉じていた扉をついにこじ開けた。

今春、群馬大医学部に編入学を決めた中本広海さん(28)。幼いころから抱いていた医師への道を歩み始め、改めて思うのはその存在の大きさだ。

「医師の対応次第で遺族が立ち直る早さも変わる。患者さんに『この先生に出会えてよかった』と思ってもらえるような医師になりたい」

バイク好きの父(享年42)をツーリング中の事故で亡くしたのは小4の時。頭では父の死を理解できたものの実感は伴わなかった。ただ、父の遺体と対面した時、漠然と憧れていた医師という職業に絶対になる」と決めた。

「命を救う、というより、自分たち家族のような悲しむ人を増やしたくないという思いが強かったです」

父の治療を担当し、傷の状態や心臓マッサージのことなどを丁寧に説明してくれた救急医の姿は今も鮮明だ。父は助からなかったが最後まで手を尽くしてくれ、今も第一線で救命にあたる。その姿に自分の未来を重ね合わせた。

が、大学受験の最難関とされる医学部への道は険しい。

「父と同じ状態の人が運ばれてきたら」と考えると、何もできない自分を想像して怖くなり、決心が揺らいだ。「医師でなくても医療機器開発など工学の見地から命を救える

のでは」と、いったんは琉球大工学部へ進学。だが、やはり自分も救急医になって目の前の命を救いたい、という思いを捨てきれなかった。

「父の事故を単に悲しい出来事で終わらせたくない。遺族の体験を医療に生かしたい。医師として自分にしかできない仕事があるんじゃないか」

在学中に挑戦した医学部への転部はかなわなかったが、卒業後は帰京して医学部受験に臨んだ。合格への重圧に加え、指定難病の自己免疫疾患の発症も重なり、何度も心が折れかけた。その度、「(医師を)諦めていいの?」と問う母(59)と時に激しい言い合いになった。「我が家は姉と妹と私の3姉妹。母は『自分がしっかりしないと』と、父親の役割もこなしていたの

だと思えます。厳しかったけれど、母の支えがなければここまで来れなかった」

その母をはじめ、大学時代に沖縄で出会い、医学への志がくすぶり続ける自分を「医者になるのがいい」と励ましてくれた人たちが全てにいい報告がしたい。何より、ここで医師という将来の目標を諦めてしまうと「この先、ずっと何ごとにも妥協し続けてしまう気が出て」。強い思いと努力の積み重ねが結実した。

振り返ると、父を亡くした後、自分を大切に思ってくれている人との出会い全てが悲しみを乗り越えるためのグリーフ(悲嘆)ケアだった。この先の自らの経験が医療にどう生かせるのか、答えはまだない。ただ、遠回りにしても歩んできた道のりに後悔はない。

振り返ると、父を亡くした後、自分を大切に思ってくれている人との出会い全てが悲しみを乗り越えるためのグリーフ(悲嘆)ケアだった。この先の自らの経験が医療にどう生かせるのか、答えはまだない。ただ、遠回りにしても歩んできた道のりに後悔はない。

さらに交通事故の遺族だからこそ、やり遂げたい研究がある。医療者と遺族の関わり方だ。遺族の「その後」や医療へ寄せる思いを知ること、医療者が人を救うことの意味を掘り下げ、患者側への接し方を考える契機にしたい。

現場の救急医に話してみろと、「救急医は目の前の命を救うのに必死で、遺族のその後の心境を知る機会はなかなかない。命の在り方を考えるいいきっかけになる」と興味をもってもらえた。

なかもと ひろみ
中本 広海さん

群馬大学 医学部医学科 2年



実現させたい“心のバリアフリー”

今夏、米テンプル大日本校を卒業 東京心塾生・藤井莉子さん



「留学は日本を俯瞰することができ、絶好の機会だと思っています」

8月、都内にある米テンプル大学日本校国際ビジネス学科を卒業した藤井莉子さん(24)。高校卒業後、地元広島を離れて米カリフォルニア州のコミュニティカレッジ(公立の2年制大学)へ進学。卒業後は帰国して同大3年次に編入した。

元々英語は苦手だったが、大学受験に備えて通い始めた英語塾で英会話の楽しさに目覚める。さらに高2の夏、交通遺児育英会が主催する海外語学研修(米国)への参加が海外志向を決定付けた。

「ホストファミリーは私が上手に英語がしゃべれなくても、『(母国語以外の)第2言語を学んでいるだけでいい』とほめてくれたり、とても温かくて優しかった。楽しくなくて(日本に)帰らずに英語を学んでいくつもりで、帰国後、障害者支援センターで働くことを決めた。障害者支援センターで働くことを決めた。障害者支援センターで働くことを決めた。

「母国語以外の第2言語を学んでいるだけでいい」とほめてくれたり、とても温かくて優しかった。楽しくなくて(日本に)帰らずに英語を学んでいくつもりで、帰国後、障害者支援センターで働くことを決めた。障害者支援センターで働くことを決めた。

「母国語以外の第2言語を学んでいるだけでいい」とほめてくれたり、とても温かくて優しかった。楽しくなくて(日本に)帰らずに英語を学んでいくつもりで、帰国後、障害者支援センターで働くことを決めた。障害者支援センターで働くことを決めた。

縁は帰国後もSNSを通じて続き、カレッジへ進んだ後はホストファミリー宅の近くに住まいを定め、行き来が続いた。

「定期的に食事をしたり、カレッジの卒業式にも出席してくれて。日本にいる私の母が簡単に来れない分、アメリカでの親代わりでした」

カレッジでは勉強強化した。課題は多く、4年制大学への編入を考えれば、相応の成績が必要になる。と信じて勉強しました。

卒業後は現地の大学への編入を考えていたが、「物価高に不安も重なり、アメリカで学生生活が続けるのは難しい」と帰国を決断。カレッジで取得した単位を生かせるテンプル大へ編入を決めた。

大学時代、障害者支援センターで働くことを決めた。障害者支援センターで働くことを決めた。障害者支援センターで働くことを決めた。

「経済、教育、工学、デザインなどいろんな分野を専攻する学生の集まりなので、それぞれが違う視点で問題解決へ向けて取り組みます。自分にはない視点での共同作業には学びも多かった」

小6の時、母(51)は歩行中の交通事故で重度の障害を負った。当初は「寝たきり」も覚悟したが、母は「(障害は)与えられた試験。必ず乗り越えられる」とリハビリに励み、今では車いすから杖を使っている。だが、その運動までこなす。さらにはNPO法人を立ち上げ、車いすダンス大会や清掃ボランティアなど活動の幅を広げている。

高校のスピーチ部で母をテーマに話した時、外部に指摘され、母の介助

にある自分は「ヤングケアラー」と知った。よその家庭が羨ましく思え、一度だけ母と大げんかになったこともある。それでも娘に弱音を吐かず、幼い頃から言われた「継続は力」を体現した母の姿に「私も『挑戦してできないことはない』と前向きになれました」。

一方、母の世話をするうちに障害に対する社会の無理解も実感した。「タクシーの乗車拒否は当たり前。新幹線の車内で車いすごと母が転倒して周囲に見えぬふりをされた時は、二人で泣きそうになりました」

米国では建築物など障害者に配慮したルールがあり、周囲の対応も積極的。サービスや受け入れの態勢が進んでいると感じた。このため、留学中はSNSで留学生仲間と障害者福祉に関する現地情報発信を続けていた。

「日本では出る杭は打たれるというか、前例のないことを嫌がる傾向があるように思う。米国では自己表現力、精神力が鍛えられ、生きていく力が養われた。親のありがたさもよくわかりました」

来春、不動産投資業界で営業職として社会に一步を踏み出す。だが、それは障害者支援分野での起業を視野に入れている。

「日本は障害者に対する心の壁が高いように思う。社会の意識が変わるよう、心のバリアフリーを実現させたい」



歌手・俳優

森 公美子 さん

もり・くみこ 1959 年、宮城県生まれ。昭和音楽短大卒。イタリア留学などを経て 82 年、「修道女アンジェリカ」でオペラデビュー。定評ある歌唱力と魅力的なキャラクターで舞台、ドラマ、CM など出演多数。

明るくパワフル、いつも笑顔を絶やさない——そんな朗らかなイメージでおなじみの森公美子さん。舞台やテレビでの華やかな姿の一方、交通事故で重傷を負った夫の介護を続ける交通事故被害者の家族でもあります。

森さんは自らの経験を踏まえ、「周囲の支えはとても大きい。まずは『助けて』と声をあげることです」と話します。交通事故によって家族にふりかかる現実、支援の在り方などについて石橋健一会長と意見を交わしました。



(公財) 交通遺児育英会

石橋 健一 会長

いしばし・けんいち 1942 年生まれ。北大卒業後、日新製鋼(現日本製鉄)入社。96 年、交通遺児育英会。専務理事、理事長等を経て 2023 年より現職。交通遺児の修学支援に加え、返還時の負荷軽減にも取り組む。

被害者の声に耳を傾けながら支援の充実図る

——20 年前、森さんのご主人は交通事故で重い障害を負われたとうかがいました。

森 2006 年、道路を横断中に大型バイクにはねられ、頭に重傷を負いました。水が溜まって脳の形が変わるような大けがで、友人たちに「命があるうちに会いにきて」と連絡したほどです。私も病室から仕事場へ通う日々で、深刻な状況なのに番組では笑ってなきやいけなかったり。あ

転するので加害者にも被害者にもなり得るという意識を常に持つようになりました。

森 私が子どもの頃も、親が交通事故に遭った子はいいて、そうした子の生活が一変して、やがて転校していく様を見る

と胸が痛かったです。私の実家は旅館でしたので、父がよくそういった境遇の子を「ウチに呼んでこい」と言っ

森 遠慮する人も多いかも現に向けて、どのようなことが必要と考えますか。

石橋 初めて車を運転して、少しアクセルを踏んだだけで鉄の塊がグーンと動き出した時の、おそれのような感覚を常に持っていたいですね。100 回ほど無事に通った道でも 101 回目

森 悪いことの半面、学びや気付きもありました。夫の障害を機に障害者の方々と初めて接して、障害は人それぞれでも「皆が生きて助け合うことができる」と知りました。こうした出会いは私にとって

石橋 今は、家同士でそこまでのお付き合いは難しくな

石橋 その通りですね。

森 自治体のほかにも相談窓口はありますし、交通遺児

森 1、2 歳の鉄の塊が動いていることに、運転者も歩行者も緊張感を持つべきだと思います。運転者は凶器に乗っている意識を、歩行者なら点滅信号では渡らないといった心の余裕を持つてほしい。

石橋 被害体験を聞くことも大事です。当会が各地で行っている「無料出張講演」では、子ども、保護者それぞれの立場から被害体験を話してもらっていますが、来場者のアンケートを見ても心に響くようです。私たちが掲げる「ハンドルの重みは命の重み」という言葉も、あるお母さんが講演で話された言葉です。

特別対談

ハンドルの重みは命の重み

勇気を出して「助けて！」

当事者の声で社会は変わる



自分自身の当事者体験を振り返り、「いざという時に『助けて!』と言えるよう心構えを」と森さん。

の時ほど辛いことはなかったです。脳の損傷は元に戻らず、右半身に麻痺が残りました。

石橋 当時のお気持ちをうかがって、交通事故が当事者にもたらす影響の大変さがよくわかります。

森 身に染みたのは、交通事故は関わった皆の心をタメにしてしまうということです。加害者の方もすごく苦しんで、「もうバイクには乗れない」と言われて。私自身、車を運

の宝物。すごく幸せなことです。一緒に歌ったりなど、施設でのボランティア活動を通じて伝えていただいています。

森 障害を抱える夫は周囲の支えが欠かせません。事故から 20 年経ってもそれは同じです。ある時、とうとう私一人では抱えきれなくなり、役所の窓口で「どうしたらいいんですか」と泣きながら駆け込んだんです。係の方は「大丈夫です」と私を落ち着かせて「まずは障害者手帳を作り

たど気がされました。石橋 素晴らしい。一人じゃない、と実感できること自体が大きな支えになります。

森 すごく。思いやり運転だけでは防げない、ケアレスミスが事故につながることも多いだけに、多くの人に知ってもらいたい言葉ですね。

石橋 事業の改善や見直しを図るうえで、奨学生・保護者の要望を聞くことがますます重要になります。現場の声に耳を傾けながら、支援を充実させたいと思います。

石橋 必要な方に支援を届けるためにも、まずは当会の存在を知っていただくことが重要だと考え、4 年前に広報課を設けました。修学支援のほか、返還時の負担軽減などにも取り組んでおり、もっと私たちの活動を知ってもらい、頼ってほしいと思います。

石橋 体験を共有できる仲間がいるということで、心がずいぶんと楽になるようです。

石橋 体験を共有できる仲間がいるということで、心がずいぶんと楽になるようです。

石橋 体験を共有できる仲間がいるということで、心がずいぶんと楽になるようです。

石橋 体験を共有できる仲間がいるということで、心がずいぶんと楽になるようです。

石橋 体験を共有できる仲間がいるということで、心がずいぶんと楽になるようです。

石橋 体験を共有できる仲間がいるということで、心がずいぶんと楽になるようです。

石橋 体験を共有できる仲間がいるということで、心がずいぶんと楽になるようです。

石橋 体験を共有できる仲間がいるということで、心がずいぶんと楽になるようです。

石橋 体験を共有できる仲間がいるということで、心がずいぶんと楽になるようです。

石橋 体験を共有できる仲間がいるということで、心がずいぶんと楽になるようです。

石橋 体験を共有できる仲間がいるということで、心がずいぶんと楽になるようです。

石橋 体験を共有できる仲間がいるということで、心がずいぶんと楽になるようです。

交通事故で知った「皆が生きて助け合う」大切さ

